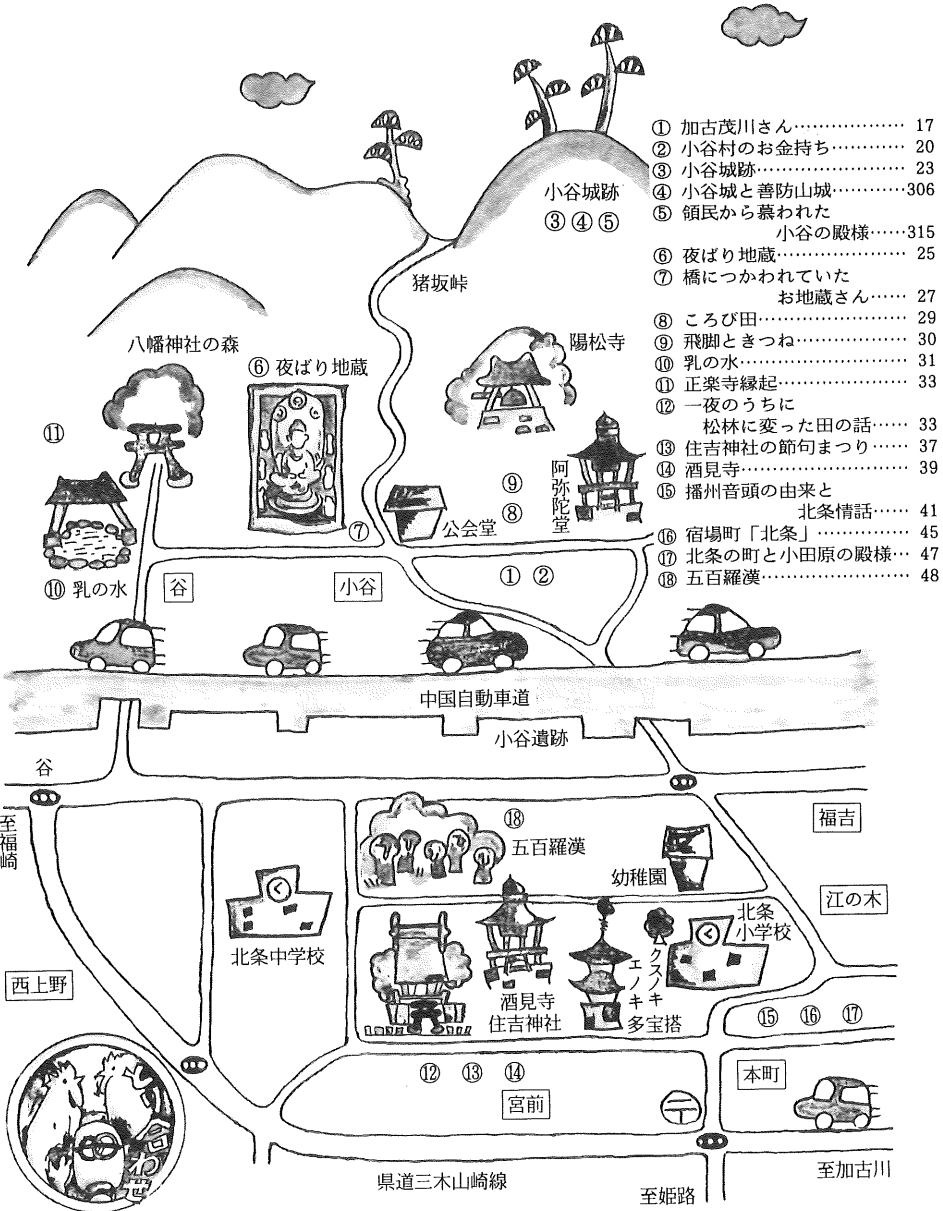


2 小谷城跡と五百羅漢

4.0キロメートル



- ① 加古茂川さん…………… 17
- ② 小谷村のお金持ち…………… 20
- ③ 小谷城跡…………… 23
- ④ 小谷城と善防山城…………… 306
- ⑤ 領民から慕われた
小谷の殿様…………… 315
- ⑥ 夜ばり地藏…………… 25
- ⑦ 橋につかわれていた
お地藏さん…………… 27
- ⑧ ころび田…………… 29
- ⑨ 飛脚ときつね…………… 30
- ⑩ 乳の水…………… 31
- ⑪ 正楽寺縁起…………… 33
- ⑫ 一夜のうちに
松林に変わった田の話…………… 33
- ⑬ 住吉神社の節句まつり…………… 37
- ⑭ 酒見寺…………… 39
- ⑮ 播州音頭の由来と
北条情話…………… 41
- ⑯ 宿場町「北条」…………… 45
- ⑰ 北条の町と小田原の殿様…………… 47
- ⑱ 五百羅漢…………… 48

・酒見寺多宝塔（国重要文化財）

永享元年（一四二九）宇仁郷大工村（大工町）の神田宗左衛門が棟梁となって建てられたと伝えられています。形式に地方の特徴を示した古調があり、姿の優美さといまわって、貴重な建造物です。

・酒見寺梵鐘・鐘楼（県指定文化財）

梵鐘は銘文によると、貞治三年（一一三六四）に酒見寺のために造られ、鑄造者は河内国（大阪）の平盛光であることが知られます。保存もよく、鐘楼とともに重要な文化財です。

・五百羅漢（市指定文化財）

石仏の数は四〇四体、造立の意図も正確な時代も、作者も定かではありません。この石仏には、稚拙な彫法の中に、巧みな省略があり、その素朴な造形には、近代人の共感を誘うものがあります。

・鎮岩板碑（県指定文化財）

刻銘に建治三年（一二七七）とあり、保存もよく、市内における在銘石造遺品の最古のものです。

・小谷石造五輪塔（市指定文化財）

造立は鎌倉時代末期を下らないと思われ、古い手法の特徴をよく表わしています。

・小谷石仏（市指定文化財）

全体の構図や彫刻の手法はすぐれていて、鎌倉時代の作風をよくとどめているものです。康永四年（一二四五）の刻銘があり、市内石棺仏中最も価値の高いものです。

・住吉神社鶏合せと龍王舞（市指定無形文化財）

毎年四月三日（今は四月の第一土・日）の祭礼時に行なわれる古式豊かな神事です。鶏合せは宮中の鬮鶏式にならったものと言われ、二羽の雄鶏を向いあわせて、高くさし上げ、氏子の平和と親睦を祈ります。また龍王舞はジョマイと言い、猿田彦命が天孫瓊瓊命が高原に降臨されるときの道案内をされた古事によるといいう素朴な舞です。

加古茂川さんかこもせん（北条町小谷）

昔、北条の小谷こだにに、加古茂川さんというたいそう評判のよい、お医者さんが住んでいました。

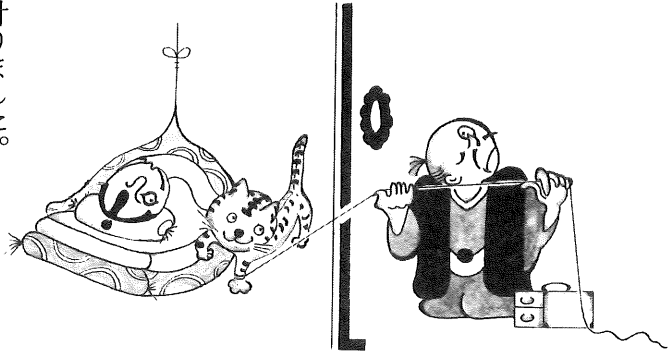
茂川さんは、たいへんな勉強家でしたので、京の都で日本でも一、二といわれるような、えらい先生からお教えを受けました。

その上、家が貧乏でお金が払えないような人にも、親切にめんどろを見ましたので、茂川さんの家の門かどには、いつも見てもらいたい人たちが長い長い行列ができるほどでした。

あるときなど、茂川さんがとある農家の前を通りかかると、のどにお餅をつめて苦しんでいる老人がありました。茂川さんは、すぐさま裏の畑からゴボウを一本抜いてきて、火にあぶりシナシナにさせて食道に通して、この老人を助けたこともあります。

その頃、明石のお殿様は原因のわからない病気で、永い間床にいていました。お城つきのお医者様はもちろん、京都や大阪からもえらいお医者さんが何人も呼ばれて、お殿様を診察しましたが、一向に効きめがありません。お城の人たちは、心配でたまりません。

そんな時、茂川さんの評判が、困りはてているお城の人たちの耳にも入って来たのです。



を計りました。

茂川さんが帰った後、家臣が茂川さんの書いた処方箋しよほうせんを見て驚きました。大きな字で、「かつおぶし」とだけ書いてあるではありませんか。

「そんな評判のいい医者なら、お殿様の病気も治せるかも知れない」
家来の一人がいました。

「だが、山奥の田舎医者に、お殿様をじきじきに見せるわけにはいか
んだらう」

身分制度のきびしかった頃ですから、他の家来は口々に反対しました。
「名案はないものだろうか」

みんなは頭をひねって考えました。

「そんならお殿様の手に糸を結び、その糸の端を襖ふすまごしにその医者に持たせて、脈をとらせばよいだろう」

みんなの意見がまとまり、さっそく茂川さんがお城に呼ばれました。

「ご無礼のないように」

茂川さんは、言われたとおり、大きな襖ふすまごしに糸の端を持って脈搏みやくはく

そのわけはこうだったのです。はじめから田舎医者の方を茂川さんをばかにしていた殿様が、茂川さんをかろうつもりで、糸で自分の手を結ぶかわりに、猫の足にその糸を結んでいたのです。茂川さんはこのことをちゃんと見やぶったのです。だから、「猫にかつおぶし」という言葉にかけて殿様のいたずらをいさめたのです。

これを知った殿様は、たいそう感心しました。そして自分が茂川さんをばかにしたことを、ほんとうにすまなく思いました。

そこで、何回も家来を小谷の茂川さんの家へつかいに出して、自分が悪かったことを詫言るとともに、もう一度城へ来て自分を見てほしいと頼みました。茂川さんは、なかなか腰を上げませんでした。相手が殿様です。いつまでもことわってばかりいるわけにもいきません。何度目かのまねきで、再び明石の城に上がりました。今度は前とうって変わって、それはそれはいいに迎えられました。

すぐに病室に通された茂川さんは、殿様をくわしく診察して言いました。

「殿様、この病気はなかなかの重病です。悪くすると命取りになるかも知れません。あと二ヶ月ほどが一番大切な時です。でもただ一つ助かる方法があります。それは、毎日目をはなさずに自分の足の裏を見ていることです。そしてたとえどんなに小さなできものも見つけたら、早馬でわたしにお知らせ下さい。私がかけてつけて、その日のうちに手当をすれば助かります。くれぐれも、足の裏にご注意下さい」

こういって茂川さんは帰って行きました。

さあ、それからというものは、殿様は朝から晩までいつときも目をはなさずに、足の裏ばかり注意して見ていました。

するとどうでしょう。不思議なことに、殿様の病気が治ってしまったのです。

茂川さんは、殿様の病気が今でいうノイローゼであることを知って、殿様の気持を他のものに移すために足の裏に注意を向けさせたのです。

茂川さんの評判は、いよいよ高まりました。

(播磨郷土研究第十二号 三枝啓助氏の文より)

小谷村のお金持ち (北条町小谷)

昔、小谷の村(北条町小谷)にたいそうなお金持ちが住んでおりました。

そのお屋敷は、それはそれは広い広いお屋敷でしたので、一方の端からは、向うの端が見えないほどで、まるでお城のようでした。

お金持ちは、

「わしは姫路へ行くのに、他人の土地はひとつも通らずとも、自分の田んぼだけ通って行けるのじゃ」といつも自慢にしていました。

ある日、下男を呼んで、

「庭の梅も咲きそろうたで、もう春も近いようじゃ。田に灰をまいてくれんか」

と申しつけました。

こんな寒い日に、野良仕事はかなわんわいと思った下男は、

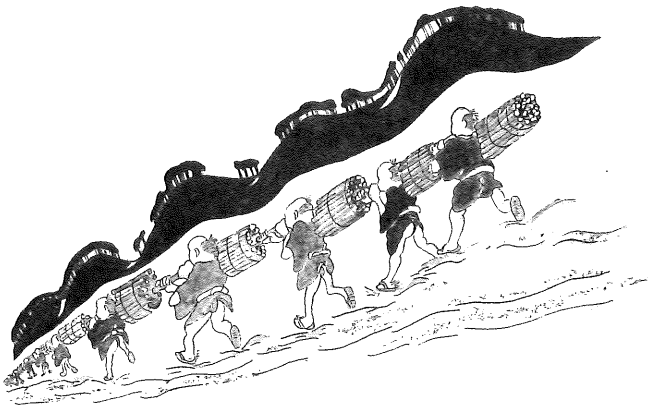
「旦那はん、きょうはずい分風が強いようじゃで、こんな日に灰をまいたら、みんなどっかへ飛んでいってしまいますわな」

と、いいました。しかし、金持ちは、

「心配はいらん、どこへ飛んでいったところで、みいんなわしの田じゃ。

ぐずぐずせずに早ようかからんかい」

と言われて、下男はしぶしぶ灰まきに出かけたということです。



また、このお金持ちは、方々にたくさん山の山を持っておりましたので、窪田町くぼたに今でも小谷山と呼ばれている山があります。

お金持ちは、冬になるとこの山にも、年々十人も二十人もの人夫を入れて柴刈しばかりをさせておりました。一日働いてもその日食うだけがやっとという安い賃金でしたので、人夫たちのほとんどは、真面目に働こうとはしませんでした。山に入った人夫たちは、大部分の時間休んだり遊んだりして、一日を過ごしたのです。

しかし、山から降りる時には、柴をかついで降りなければなりません。普通は一人が二束の柴を天秤棒てんびんぼうでかつぐのですが、これだと、十人がそれぞれ柴をかつぐためには、二十束の柴を作っておかねばなりません。少しの柴で、たくさん柴をしたように見せかける方法はないものかと、いろいろ考えたすえ、人夫たちは、こんなへんてこな方法を考えたのです。

それは柴を一束ずつ一メートル間隔くらいに一列に並べ、柴束と柴束の間に棒をさして、その棒をそれぞれ人夫たちがかついでいくという方法です。これだと、同じ十人の人夫がかついても、十一束の柴ですみません。しかも長い縦の列ができますから、ずい分多くの柴をかついでいるように見えるのです。

人々は、人夫たちのなまけ心を笑いながらも、このおもしろい柴の行列を、毎年こころ待ちにするようになったということです。

(金鹿文之助氏・中安義典氏の話より)

小谷城址（北条町小谷）



小谷城は、俗に小谷の城山と呼ばれている北条町小谷の陽松寺の裏山頂上にあつた。頂上は整地された数段の平地があり、空堀や塀をめぐらせたと思われる本丸の跡がある。城の南北は自然の要害で、東方も急坂があり攻めにくい地形であるが、西方だけは谷町の八幡神社裏から峰続きで弱点になっているため、一番東の頂上を本丸にして西へ二の丸・三の丸・四の丸・五の丸と五段に分け、二重三重に濠をめぐらせて、本丸から五の丸まで南北に幅一間（一・八メートル）ばかりの空堀を掘つていた。更に西へ小高い峰続きがあつて、少し高まつた平地に出城形式の西小丸を配してことがうかがえる。城の規模はそんなに大きくなくかつたが石垣も使われていたということで、この石垣は後世陽松寺改修の時山上から転落させて寺の石垣に利用したという。本丸の東方に大きな老松が一本生えていて、陽松寺の寺号はこれから来たそうであるが、この老松の近くに井戸の跡があつた。城には籠城ろうじょうにそなえて水が最も大切で、城の正面中腹の黒岩と呼ばれている所には今でも清水が湧いている。

室町時代の山城は、戦の時だけに使われるもので、城主等は平時は麓で生活していたのである。陽松寺の前に、市指定五輪塔のある付近が「殿がち」と呼ばれていて、城主の構居があった所と考えられる。土を掘れば付近からはいくらでも古瓦が出る。近くの竹やぶの中の空井戸から城へ向って人の立って歩けるほどもある大きな空洞が発見されていて、中から甲冑の破片が出たという。この空井戸は昔から水のたまらない不用の井戸と思われていたが、実は抜穴ぬけあなに入るための偽装の井戸であったのだ。この抜穴は伝説では中腹の黒岩まで続いていたと言われ、この黒岩は昔から神として祀られていて、そばの穴にはヌシ（大蛇）がいるから近づいてはいけないと言いつけられていたという。これも抜穴の目印に置いた黒岩を人に知られないためのことであつたと思われる。また構居の外側には内堀・外堀がとりまいていて、一事ある時には、寺の裏の池から水を引いて満したとも考えられる。おもしろいのはこの外堀の内に居住してそれを姓にしたのが堀中氏ほりなかであり、内堀の中に居住したのが堀内氏ほりのうちだという。いずれの姓も陽松寺の過去帳に残されている。

陽松寺裏手城山の山麓にある祐尚の墓石やたくさん五輪塔、構居址の石造五輪などとともに小谷城の昔を今に語り伝えている。

夜ばり地蔵（北条町小谷）

ある年の秋のはじめ頃のことでございます。

ここ小谷の城山をすっぽりおおっているドングリの木々も、その葉をにわかには色づかせはじめ、時々青空にどこからともなく飛んで来たちぎれ雲から、糸を引くように落ちてくる時雨に、冷たく濡れておりました。

ついこのあいだまでの残暑が、何だか信じられないような、そんなことこのう、うそ寒い日の夕暮どきでございました。

小さな子どもをつれた女の巡礼が、おりからのわか雨を避けるように、辻堂に身を寄せて来たのでございます。

西の空は、夕やけの色をにじませておりながら、雨はなかなかやみそうにありません。秋の空は暮れやすく、あたりはにわかには暗さを増して来ました。

じれったそうに度々西の空をうかがっていたこの巡礼も、ついにあきらめたようすで、わらじをぬぎはじめたのでご



ざいます。

この辻堂つじどうに祀まつられているお地藏さんに、

「雨に降られて困っております。どうか一夜の宿をお借し下さい」とていねいをお願いをして、子どもといっしょにお堂に上がりこんだ巡礼には、一つの気がかりがありました。それは、つれてくる子どもが、毎夜のように「夜ばりをこく」（寝小便をする）ことでございます。

それで、いつもの晩には、この子どもに「おむつ」をさせてやすませていたのでございますが、きょうはにわか雨のためにすっかり何もかも濡らしてしまつたのです。

もし、このお地藏さんの前でおもらしをしてはと、それが心配だったのでございます。

何かいい思案はないものかと考えあぐんだすえ、このお地藏さんの「よだれかけ」を一枚拝借することにいたしました。

「どうか、この子が夜ばりをしませんように」

と、子どもといっしょにお詫びとお祈りをすませて、親子はお堂の隅で、このお地藏さんに見守られながら、丸く抱きあって眠りについたのでございます。

一夜が明けてみると、昨日の雨はうそのように、朝から暖かい太陽の光がいっぱいにこのお堂を照らしておりました。

そして驚いたことには、あんなにも心配していた子どもの夜ばりが、止まっていたのでございます。親子はいく度もいく度もお地藏さんにお礼をいながら、うれしそうに帰って行きました。

それからというものの、このお地藏さんは、『夜ばり地藏』として、みんなからそれはそれは親しまれ、慕われつづけて来たのでございます。

(中安義典氏の話より)

橋に使われていた地藏(北条町小谷)

小谷の公会堂のすぐ西に、小さな小川があります。そこには今も二メートルばかりの石の橋がかかっています。

この橋は、その昔、牛を引いてここを渡ろうとする村人を大へん困らせたのだそうです。きょうも暗くなるまで田を耕していた働き者の喜市が、

「もうちょっと残ってしまたが、こう暗くなつては仕事にならん。あしたのことにするか」と、一人ごとを言い、しかたなさそうに牛を引いて、この橋にさしかかりました。牛は、一日の仕事でつか

れているのに、現金なものです。畜生ながらうまやへ帰れると知ってか、急ぎ足で、喜市を引っぱるようにして、この橋のところまで帰って来ました。ところが、この橋の手前で、ピタリと足を止めてしまって、どうしても渡ろうとしないのです。

「やれやれ、また渡れへん。困ったやつや」

喜市はブツブツ言いながら、牛の尻を追い縄で勢いよく打ちました。驚いた牛は、前足を高くさし上げるようにして、一気に橋を飛びこしてしまいました。ところが、その拍子に足を痛めてしまったのです。

牛が足を折っては、あすから田をすくことができせん。喜市はがっくりと気をおとしました。朝になって、このことを聞いた村人たちは、

「喜市の牛も足を折ったそうな」

「あないに牛がきらう橋は、どう考えてもおかしいぞ」

「何ぞ あんのとちがうやろか」

「いっぺん掘りおこしてみよやないか」

と、相談がまとまり、おそろおそろ橋の石を掘りおこしたのです。

「あれ！ 地蔵はんや」

「ほんに 地蔵はんが彫ってある」

村人たちは、驚きの声を上げるといっしょに、牛が渡らなかつた理由に合点がいき、みんなでうなずきあいました。

実は、掘り起こされたこの地藏さんが、現在地藏堂にまつてある、小谷の夜ばかりこき地藏なのです。

(吉田しげの氏の話より)

ころび田 (北条町小谷)

小谷の阿弥陀堂は、この村の名医加古茂川さんが建てたお堂です。お堂には立派な阿弥陀如来像が祀つてあるのですが、ある時、ドロボウがこの阿弥陀さんを盗みに来たのです。

やつとので阿弥陀さまを背負い出したドロボウでしたが、余りの重さに少し歩いただけで、背負つたままころんでしまったのです。再び背負おうとしましたが、こんどはどんなに力を入れてみても持ち上がるどころかびくとも動きません。ドロボウはとうとうあきらめて、阿弥陀さんをそのままそこに残して逃げ帰つたということです。

ドロボウがころんだ田は今も「ころび田」と呼ばれています。

(吉田しげの氏の話より)

飛脚ときつね（北条町小谷）

昔、小谷村に一人の飛脚ひきやくがいた。毎日のように社（社町）へかよっていた。ある夏の朝がた、川のそばを通りかかってふと見ると、きつねが水の中の藻もを頭や体につけ、娘にばけた。

「さては、わしをだますつもりやな。」

飛脚が用心しつつ道を急いでいると、その娘は社へつれて行ってくれと道づれになった。途中あまり暑いので、知りあい家で一休みした。飛脚がそら寝をしていると、娘も横になったが、すっかり油断してきつねの正体をあらわしてしまった。

飛脚はそつと部屋をぬけ出し、家の人に知らせた。びっくりした人たちは、木ぎれやほうきできつねをなぐりつけた。にげ場をうしなつたきつねは、窓をこわしていちもくさんにとびだしたと伝えている。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）

乳の水 (谷町)

神功皇后が、戦いのために大和を出て西へ向かう途中、皇子をお産みになりました。

戦陣のことですから、御子をつれていくわけにいきません。そこで加古川の氷丘におかれたまま、さらに西へ進んでいかれました。

後に残された皇子の付き人たちは、御子に飲ませる乳がなく、思案にくれておりました。近くの乳の出る女から直接さし上げるわけにもいかず、といって都から乳母を呼びよせるには、長い日数がかかります。

その時です。加古川の上を北の方から一羽のハトが飛んで来て、御子の寝所に舞い下りたのです。ハトは御子のそばにかけよると、口にふくんで来た水を、そっと御子に飲ませたではありませんか。

びっくりしている家来たちをしりめに、ハトはすばやく飛びたって、しばらくすると再びもどって来ては、御子に水を飲ませるのです。



不思議に思った家来が、ハトの飛びたつ方へつれてみると、鴨の国修布すふの里（加西の富田）にある八幡神社の森へ消えました。ハトが口にくんで運んで来たのは、この八幡神社の「乳の水」と言われている井戸水だったのです。

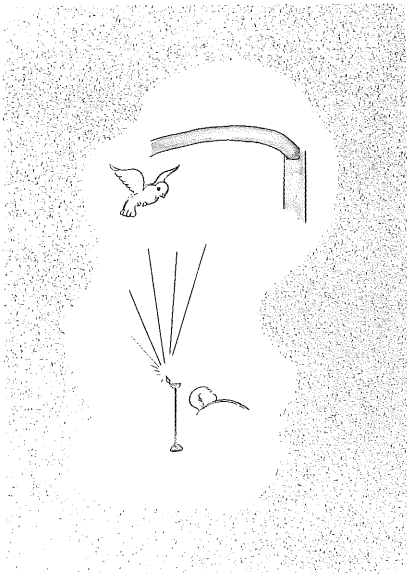
この井戸は、深さが二メートルほどあって、清水がこんこんと湧き出、どうしたことか夜中になると真白な乳のようになり、朝見ると水はもとのような澄んだ水になっていますが、まわりの石に乳のよう白いものがいっぱいついているのです。

それで、里人たちはこの井戸を「乳の水」と呼んでいたのです。

ハトはこの水を来る日も来る日も、せっせと山を越えて川向うの水丘まで運んでは、皇子を育てたのです。

この「乳の水」は、乳の出にくい婦人が、八幡神社に参拝してこの水をもらって帰り、これを毎日服用すると、たちまち乳の出がよくなると信じられております。

（加西郡誌及び学校厚生会「郷土の民話」東播編より）



正樂寺縁起（西谷東町）

大化の頃のある夕方、西谷村の寺山が雷かみなりのように鳴り、また地震のようにゆれた。村人たちは大いに恐れ怪しみ、翌朝、山へ行ってみると崖がけがくずれ一基の石塔婆をふき出し、中に地藏尊が鎮座してゐる。そのお姿はまことに尊く、見る者すべて思わず礼拝してしまつた。

村人たちは、さっそくお堂を建ててこの像をすえお祀りしました。これが正樂寺のはじまりだと伝えてゐる。

（北播磨の伝説・吉田省三氏編著より）

一夜のうちに松林に変わった田の話（北条町北条）

今から千二百年以上も昔の話です。鴨郡かもつり（今の加西市）で、一番険しく神聖な山と里人たちがあがめていた鎌倉の峰（河内町）に、年老いた翁おきなと媪おんなの神が四人の王子と一人の王女をつれておいでになりました。鎌倉の峰からは、南西の方に三重里みえのさと（北条町）の平野が一望され、南東には由羅野ゆらのの台地（社町）が見わたせるうえ、遠く明石の沖を通る船の帆かげも見える、すばらしい位置にありましたので、翁と媪の神はた

いそうここが気に入られ、四方の里人たちに多くの恵みを与えられておりました。

しかし、この翁と媪の神に従って来た佐保神さほのかみは、この鎌倉山が気に入りませんでした。こんな狭苦しい山の上より、もっと広々とした平地で、のんびりと暮したいと思いました。それで、翁と媪の神に、眼下に見える三重の里や由羅野の広い平野を指差しながら、

「あんなにいい土地があるのに、きゅうくつなこんな山の上にいる手はありません。早く降りて行きましよう」

と、ことあるごとに誘っておりました。

一度や二度ならず、余りに何回も言うものですから、翁の神もとうとうおれて、この鎌倉の峰を降りる決心をせざるを得なくなりました。

三重の里（北条町）に降りることに決めた一行は、鎌倉の峰を出て途中、鴨坂北谷（北条町古坂）の岩上に腰をおろして一休みしました。新しい土地についてあれこれ思いをめぐらせていたときです。佐保神がそのすきをねらって神宝を盗んでしまったのです。

驚いた翁の神は、第三・第四の二人の王子にすぐさま佐保神の後を追わせましたが、佐保神はやくも大川（加古川）を渡って、その東へ逃げてしまっておりました。二人の王子は川を渡ろうとしましたが、水が多くて渡ることができません。しかたなく、すぐすぐと引き返して来ました。

これを知った翁の神は

「この弱虫めが！」と烈火のごとく怒って、二王子を勘当かんとうしてしまいました。

ところで、三重の里（北条町）には、山の酒人という人が住んでおりました。この人はたいへんな金持ちでしたので、大きな屋敷に住み、たくさんたの田を持っておりました。

ちょうど田植の時期で、酒人は明日から田植を始めようと、田に水をはり苗を打たせておりました。ところがどうしたことでしょう。酒人の屋敷の庭に大きなケヤキの木が、ニョキ、ニョキと生えて来たのです。

田の準備をしていた一門の人たちは、腰をぬかささんばかりに驚いて、屋敷に飛んで帰りました。

見るとこの大ケヤキの下に、翁と媪、それに三人の立派な身なりの若者と娘が立っているではありませんか。

「これはただ者ではないぞ」

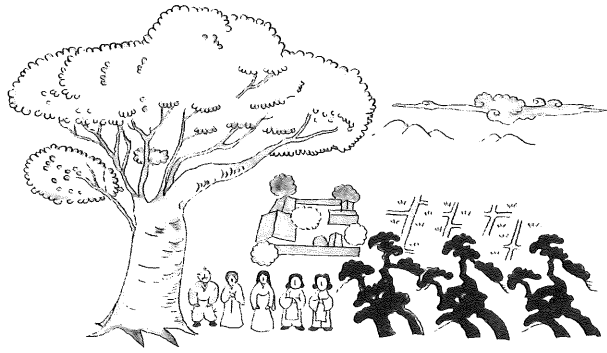
と思った酒人が、うやうやしく近づきますと、五人は、

「わたしたちを一晚泊めては下さらんか」

とたのみました。

「どうぞご遠慮なくおはいり下さい」

と、ていねいに招き入れた酒人は、五人を手あつくもてなしました。お酒がふるまわれ、興にのった酒人が、



「みなさんは、ただの人ではないとおみうけするのですが、もしそうなら、その証拠を私たちに見せてはいただけませんか」と、いいました。翁はただ笑っているだけでしたので、その夜はそのままになってしまいました。

ところがどうでしょう。一夜が明けて、みんなはびっくりぎょうてんしてしまいました。五人の姿は煙のように消えてしまっていたばかりでなく、昨日苗を打っておいた自分の田六町歩は、ことごとく平地になり、苗が大きな松の木に変わっているではありませんか。

「あれはきつと神様だったに違いない。自分が疑って昨夜あんなことを言ってしまったので、田がみんな松林になってしまったのだ」と考えた酒人は、早速村人たちを集めて、この神様をお祀りしようと相談しました。

やがてこの松林に立派な神殿が建ち、翁と二王子は住吉神社に、媼と王女は酒見神社にお祀りしました。川が渡れず翁の神に怒られても返事ができなかつたので、勘当されてしまった二王子は、別に住吉神社の東隣の江ノ木町磯部神社にまつられています。

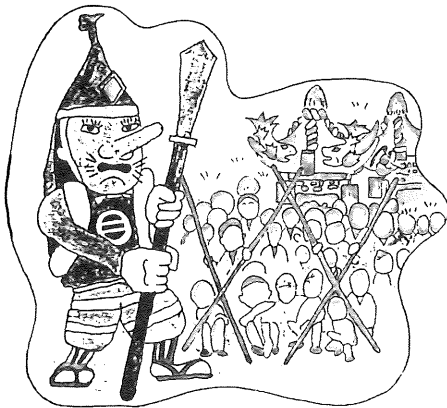
それからというものは、山の酒人はいよいよお金持ちになり、北条もだんだんにぎやかな町になって行きました。今でも北条では、田植はどんなつごうがあってもその日のうちに植えてしまい、絶対に夜苗を打たない習わしになっておりますし、住吉の森の松の木は苗松といって、燃やすとわらの灰が残るといったえております。

(加西郡誌及び塚原広治氏の話より)

住吉神社の節句まつり(北条町北条)

代々針間鴨国造をつとめた山氏が、その祖先の神を祀ったのがはじまりと考えられる北条の住吉神社は、酒見神社とも呼ばれ、市内ではいしべ、乎疑原神社とともに延喜式(九二七年完成)に記された非常に歴史の古い神社です。

毎年四月二日、三日(今は四月の第一の土・日曜)に行われる節句まつりは、播州三大祭りの一つとして、また他に先がけて行われる春祭りとして、大変名高いものです。特に十四台の化粧屋台が町内を練り歩き、





次々に宮入りして勢ぞろいするさまは、豪壮そのものといつてよいでしょう。またこの祭礼には、「龍王舞（シヨマイ）」と「鶏合せ」^{とりあわせ}が古式豊かに行われ、伝統を伝えていきます。「龍王舞」は、猿田彦命^{さるたひこのみこと}が、天孫瓊瓊命^{にぎあみこと}が、高天原^{たかまがはら}に降臨^{こうりん}されるとき^にの道案内の動作を模したものとされています。

「鶏合せ」は、宮中の習わしにならったものらしく、東西の執行人が両手で鶏を向い合うように高くさし上げ、東西氏子の平和と親睦の祈りをこめて行うもので八百五十年も前から続いています。

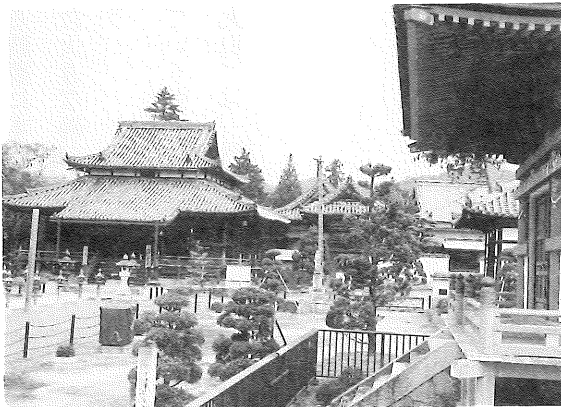
さて、この祭りには、鶏の肉や卵を食べて神事にたずさわると必ずけがをするという言い伝えがあり、今でも神輿^{みこし}をかく氏子の方々は勿論、屋台をかく人も祭りの当日は決して鶏肉、鶏卵を食べないといえます。

なお、お宮の真南には鳥居の礎石が残っていますが、どうしたわけか、昔、一晩のうちにここにあった大鳥居が、飾磨沖へ飛んでいってしまったのだそうです。

酒見寺（北条町北条）

縁起えんぎによると、行基菩薩ぎょうきぼさつが酒見明神（住吉神社）に詣られた時、「仏法の力をかりて国家を守護したいので寺院を建立してほしい」との神のおつげがあり、天平十七年（七四五）に建てられた住吉神社の別当である。仁平三年（一一五三）、大旱りおほひでが続いた時近衛天皇の勅願によって播磨六山（書写・増位・八徳・妙徳・法華・酒見）の僧がここに集まり、大般若経だいはんやくきょうを読んで雨乞いをした。すると読経半ばにしてたちまち雨が降り出し、万物すべてよみがえったので、その後この般若会えは恒例の行事となり、天皇からの勅使ちよしも毎年お詣りになるようになった。住吉神社の勅使塚はこの記念塚で、今はその頂上で鶏合せの神事がある。

この酒見寺は度々兵火に焼かれたことがあり、中でも秀吉の、三木攻めの際の天正の兵火には、境内ごとごとく焦土となったという。この時宗作という人、夢に高僧が現われて火事をつげたので、驚いて起きて見れば本堂は猛火に包まれていた。火の中を堂に入り本尊十一面観音像を背負い出したという。



また寛永の初め、隆恵という僧があり、両肩が痛くて困っていたが、ある時夢に本尊が現われて「本堂を開けて私の体をみなさい」と言われた。翌日、開扉してみると仏像の両肩に大きな傷が出来ていた。さっそく仏師に修理させたところ、たちまち隆恵の肩の痛みもとれたといわれる。

なお、この酒見寺では、常行堂（引声堂）で九月十日より七日間行われている引声会と呼ばれる法要は特に安産に靈験があるといわれてたくさんのお詣りがあり、本尊の縁日（八月九日）は「四方六千」といってお詣りも多いが、昔は音頭踊りが催され、大変にぎわったものである。

（加西郡誌より）

播州音頭の由来と北条情話

今から三千年前、釈尊が在世中修ぜられた施餓鬼せがきの読経どきょうが、音頭の始めだと聞かされている。すなわち、インドから唐（中国）へ、そして日本へ伝来の後は、各地の風習により「孟蘭盆うらぼん」の施餓鬼せがきに音頭を口解くぐくようになつたといわれる。

播州音頭もその一つで、明治初年までは、「吉川節よかわげ」と称し明治四・五年頃初代岩崎千鶴の考案により「加東節」と改められ、その後、加東、加西、多可、美のう、加古、印南と播州一円に流行し、大正初期に「播州音頭」と改めて、今日に至っている。

北条情話

一、花のつぼみを 恋ゆえ 散らす

恋はくせもの 思案の ほかよ

時に播州酒見 北条 本町通り

造り酒屋で 菊屋の番頭

神崎郡は 辻川生れで その名が弥助やすけ

向いあわした お茶屋の娘

若宇わかうのこまち小町と あだ名をとりて

花も恥じらう あで姿

一人娘で その名が お勝かつ

朝な夕なに 顔 みあわせて

互にかわした ことのはも

恋のめばえや 縁のはし

住吉まつりの その夜さに 二人が つもる

胸の内

とけて うれしい 初恋や

末の末まで 千代かけて

どうぞ 変って 下さるな

なんの 変って よいものか

おおはずかしや

二、同じ本町呉服問屋でその名も高く

酒見屋久兵衛きゅうべえが お勝にまよて

通いたるを 継母まはは お熊くま

欲に目のない 色と金

番頭ふぜいの 弥助のことは 思いきり

酒見屋の旦那様に従ってたもいのと

継母 お熊の そのにくらしさ

聞いて お勝は なむさんぼう大恩受けたる

母様の お言葉なれど

弥助さんの おんことは

たとえ寝た間も 忘れかね

思いきられぬ 身の因果

いったん 変るな 変らじと

誓を 立てし 二人の仲

操の鏡 くもらせて 女の道がどこで立つ

お熊は 声を 荒らだてて

泣き入る娘 引っ立てて

夜毎 日毎の 責め 折かんに

お勝は 身も世もあらぬ 嘆き

こがれ 慕おた 恋人の

声さえ聞こえず お顔さえ見ること

かなわぬ かごの鳥

今頃は 弥助さん どうしておいでなさるやら

せめて 思いの万分の一

夢なりとも 知らせたい

ああ 母様の どう欲な

もったいないことながら

生みの母様 あるならば

こうした嘆きは あるまいにと

よよと その場に泣きしずむ

三、思いは 同じ 菊屋の弥助

忍び姿で あいにくる

見るより お勝は とびたつ思い

あいたかったと すがりつき

一部始終の 身の上話

聞くに 弥助は 胸せまり

金が仇の この世のたとえ

かないこの身に 義理たてて

どう欲非道の 継母の

情けようしゃも 荒縄で

しばり上げての 折かんに

ようまあ 辛抱しんぼうしてくれた

うれしいわいなと 男泣き

四、この世の縁は 浅くとも

未来は 必ず 夫婦じゃと

二人は 手に手を 取りかわし

古井戸 さして 身をなげる

弥助は 水天様のご加護かごによりて

その場は 命 助かりしが

亡者の菩提 とむらいせんと

仏法修業の 身となりて

西国巡礼 いたさるる

不思議や お勝のたましい 身につきまとい

茶屋に休めば お茶二つ

宿に泊まれば お膳も二つ

ああ おそろしや 女の執念しゅうねん

許してくれよ これお勝

そなた一人は やりはせぬ

弥助も ついに 恋人の

後を慕おて 死出の旅

恋と情けの しがらみ話

酒見北条に その名も高く

今に残るぞ あわれなり

(加西播州音頭保存会発行・保存記念盤「北条情話」)

宿場町「北条」

北条の町がいつのころから、町としてのにぎわいを見せるようになったのかはよくわかりませんが、住吉神社や酒見寺が、千年以上の歴史をもっていることを考えあわせると、ずい分昔から人の集まる土地であったことは想像できます。

特に江戸時代の頃には、北条の町の存在が大きな意義を持っていたのです。

というのは、「すべての道は、北条に集まる」といっていいほど、北条は当時の交通の要衝でした。姫路街道、兵庫街道、西京街道、宮津（丹波）街道、加古川高砂街道、但馬街道、これらのすべてが北条の町を起点にして四方へ通じていたのです。中でも、姫路街道に続く西京街道は、姫路から北条・篠山を経て京都への一番の近道で、山陽道の裏街道として栄えましたから、西国と京都を行き来した役人や学者、武士など多くの人たちがここ北条の町を通りました。また、兵庫街道に続く但馬街道は、主に難波（大阪）・兵庫（神戸）と、三木・北条・生野を経て山陰を結ぶ主要道として、ことに商人の行き来が多かったようです。それでこれらの旅人や商人のための宿が建ち、市が開かれるようになって、北条は宿場町としてのにぎわいを見せたのです。今の本町や御幸町・御旅町は、そんな街道にそった古い町筋だったのです。

本町から通りを北へ進んで東へ横尾の方へ折れる角は、「札場」と呼ばれていて、お触れの高札がかかげ

られた所だということですが。

このように、大きな街道に沿っていた北条の町は、京都や大阪の文化に接する機会が多かったためでしょうか、江戸時代には、越前福井藩主に仕えた伊藤士善や、豊田平七・尾芝静所・大野乙山といった儒学者、京都に遊学中母親から送られて来た二百通もの手紙を大切に保存し、母親の死後五百羅漢境内に埋めて文塚としたという小島尚善や菅野真斎・加古茂川などの医者等、全国に名を知られるほどの人がたくさん出ています。

そして、これら知識人を生み、育くんだ北条の町を慕って、逆に中央からも有名な人たちがこの地を訪れ、長く滞在して町の人たちと同じ質素な生活をしながら、書物を読み、乞われるままに学問や技術を教えているのです。

中でも、南画の大家田能村直入や岡田半江などは、北条に長く留ってたくさんの絵を残し、立派な弟子を育てています。田能村直入の書いた「北条八景」の絵は特に有名ですし、彼は大野乙山の三男を養子に迎えて高名な画家にしています。高瀬北潜、三枝夏畦は、岡田半江に師事して名をなした北条の町の人たちです。

おもしろいことには、直入や半江が北条で書き残した絵には、きまって「雁村にて」とありますが、当時北条の町の家並の形が、高い所から見ると羽を広げて大空を飛んでいる雁の姿に似ていたところから「雁村」と呼んだのだということですが。

(十河好夫氏の話及び北条町誌より)

北条の町と小田原の殿様

北条の町が小田原の殿様大久保家の領地であったという、不思議な気がしますが、天和元年（一六八一）から延享二年（一七四五）にわたる六十四年間、大久保領だったのです。

小田原藩は、富士山の噴火でその領地、伊豆や相模が荒れて作物が出来なくなってしまうため、幕府から全国に臨時に替地をもらったのです。東播では、多可、加西、印南に十六ヶ村約二万石を七十年の期限つきで領地として与えられました。

この時、いちまるまたしろうたかひ一丸又四郎高重という人が、初代代官としてやって来ました。領主の権力をまかされた代官です。城を遠く離れた飛領地で、しかも期限つきともなれば、私利私欲に走って領民を苦しめる人が多いのですが、高重はそうではありませんでした。そればかりか、領民のために出来る限りの良い政治をしたのです。

高砂市伊保町中島は、その頃「中島には嫁にやるな」と言われる程、度々加古川が氾濫はんらんして、作物の取れないことが多かったのです。高重は、さっそく水を治める竹藪たけやぶを作り、橋をかけ、植林して、弁財天と稲荷神社を建てる一方、税を軽くしました。このため、中島一帯は見違えるほど肥えた土地になり、村人たちは高重を神のように慕ったということです。

これはほんの一例にすぎません。高重は任地のすみずみまで善政をほどこしました。そして妻も娘もここ

東播の任地に骨をうずめたのです。北条の人たちも代官高重の善政に感謝し、五百羅漢境内に供養塔を建て、永くその徳をしのびました。

北条にある大信寺は、大久保家の菩提寺ぼだいじとして、城主代々の位牌いはいを今に伝えていきます。

(播磨郷土研究第十一号、三枝啓助氏の文より)

五百羅漢(北条町北条)

羅漢寺にたたずむ四百四体の石仏。ほほえんでいる顔、悲しそうな顔、ものいいたげな顔、瞑想めいそうする顔……。見る者の心によって表情をかえる羅漢。その作者も、造立の意図も、正確な時代も定かにはわからないといえます。

慶長十五年(一六一〇)に再興の文字があるので、このときすでにずい分と年を経て、相当荒れ果てていたことが想像できます。いつの頃からか祀る人もなくなり、女竹や野イバラの茂るにまかせて、石仏はあちらこちらに散乱し、あるは倒れ、あるは傾いて首と胴が離れ離れになったのも多く、昔あった小庵も朽ち果ててその影すらなくなっていました。

石仏のあるものは、石材にとこれを持ち帰った者があると聞きますが、これらの人は祟りで病気になったとかいいます。

羅漢のそばにある新池が作られた時には、その堤防が決壊しないようにと人身御供ひとみごくうのかわりにこの羅漢石仏のいくつかが使われ、堤防を築く土砂の中にうずめられたそうです。

大正十年頃、第一次世界大戦が終ると、世間には大変な不景気がやって来ました。北条の町の人たちは誰いうとなく

「この不景気はみなが働かんからだ。いや五百羅漢たの祟りかもしれん。」

「町のはたの羅漢さんを荒れ果てたまま放っておいて粗末にしたからだ。」

「はたの羅漢、はたらかんをこのままにしておいたのでは不景気は直らない。」と修復にのりだしたのです。木・竹・雑草の根を起こし、大き

な壺ますしに半分ほども蝟ますしを捕え地形をならして石仏の位置を決めたのです。古井戸をさらえたところ、中からたくさん石仏が上がりました。御旅町にあった薬師堂と、酒見寺こうしんどうの庚心堂こうしんどうが移され、仏域としての体裁も整いました。現在の五百羅漢は、その後も昭和三十七年に修理されていますが、今なおこれを造った先祖のことについては謎のままになっています。



石材が高室産であることもあって、高室の石工いしくが余技で作ったものではないかとか、顔のつくりが何となくエキゾチックなことから帰化人あるいは国外からの漂流者の作でないかといった説まで、いろいろ想像をたくましくするわけです。この羅漢にちなむ話として北条の町には次のような話もあります。

昔この町に大変なお金持の油屋が住んでいました。大きな家敷をかまえ、商売は大そう繁昌して大勢の人が出入りし、付近は大そう栄えました。油屋のあった所を油屋町といい、非常に栄えたので栄町と呼ぶようになったというのですが、この金持の油屋が、何か一つ後世に残ることをしたいと考えて、五百羅漢を造ったというのです。石材一個について米一升を与えて石を集めたといえます。今、本町にある地藏さんも、その時この油屋が作らせたものだと言いますが、これとてはつきりしたものではありません。

一説には、天文年間の初め、小谷の城主赤松刑部少輔ぎょうぶしょうぼう祐向が嘉吉の乱で死んだ人たちを弔うために作ったものであるとも云われています。

その制作のいきさつが何であれ、この五百羅漢の石仏には、見る者の心に深い印象を刻みこまずにはおかない何かがあることだけは事実です。

(播磨郷土研究二十一号、大野潔氏の文他より)